

原生林保護の必要性について

渡 辺 隆 一*

今、日本の自然は大きな危機の時を迎えている。原生林の消滅である、トキやカワウソといった個々の種の日本における絶滅も非常に大きな問題でありかつ極めて残念な事態ではあるが、実はそうした問題の背後にもこの原生林保護の重要性があると考えられる。

いわゆる自然科学は人間社会の基盤となつてその生存を支えている我々の外界たる自然を対象としており、それは天文学や生物学といった多様で幅広い分科をなしている。それぞれの研究は実験室でおこなわれるとしてもその仕事の目的は自然そのものの究明にあるのでその成果は野外にかえして考える必要がある。そして、さらに野外の中で得られた結果は原生林（乱されていない純自然）へかえさねばならないのである。原生林と町の近くにみられる林とは緑という点では同じにみえてもその質においては極めて異なるのである。絵に例えれば実物と本の中に縮小されたグラフィックほどにも異なるものなのである。今、その各地の名画が木わくと画布とに分解され、二束三文で売り払われている。そのあとには安物の壁紙のような人工林か、若がえりとか天然更新とかでせいぜいが名画の薄っぺらな複製品をかける事になる。

原生林は少ないから貴重なのではない。この地球上のあらゆる事からの基準となるものだから重要なのである。我々が自然をみる時の尺度を与えてくれるメートル原器のようなものである。原生林がなくなり二次林だけになったらそこが本来の鳥やケモノ達の生息地と思ってしまうであろう。二次林では一般に種類数が減る。時として密度が極めて増大する時もあるが、その個体数の変動は大きく不安定である。現生するあらゆるものは本来原生林に住むものである。道ばたに出現する人里植物と言えどもかつては原生林中の地くずれ地といった局所的な場を占有する少数者を先祖としていられると考えられる。二次林に特徴的なシラカンバは今や長野県中に広がっているがかつては原生林中の裸地にのみ出現する少数者であったはずである。各地域の自然は地域毎の特性により個性的である。その地域自然の真の姿はこの原生林にこそ求められるべきものであろう。明らかに二次林においては地域的特性はずっと減少してしまうものだからである。

原生林はまた近年注目されている「遺伝子の多様性」

の存在にとって重要である。それは二次林に比べてたくさんの種を含んでいるというだけではない。安定的に遺伝子の多様性を受け継ぎ保全するから重要なのである。緑の需要に伴って各地に外来や地域外の植物が植えられ、時として野生種との間に交雑をおこし地域個体群の遺伝子に悪影響を及ぼしている。実は同種のもを他地から移入した場合にも厳密な意味ではその地域個体群の遺伝的構成やわずかではあっても外部形態が変化してしまう例さえ知られている。しかし、これらはいずれも路傍においての事である。原生林状態においてはそれらが導入されたとしても、その生態的立地上の不利等で、在来種の遺伝的構成は安定的に保全される事が期待しうる。これは重要な点である。資源的保存として標本庫や種子バンク、栽培園も重要ではあるが安定的かつ継続的という点では実際の原生林保護に優るものはないのである。

このような原生林がもはやすっかり失われようとしている。一部分だけを利用する択伐であとは自然の回復にまかせる、又森を痛めないようにヘリコプターで集材する等様々に気をつかいながらもなおかつ原生林を伐らうとする。しかし現時点での原生林はかつての時代の森とは大きく異なる。昔は原生林は延々と広がり部分的に皆伐がおこなわれてもその鳥やケモノは一時的に周辺の森に移動し、一度は失われた植物達もやがては周辺から様々な散布の手段によって帰ってきた。長年月のうちに十分に原形どおりに回復し得たと考えられる。しかし今はそうではない。もとより原生林はもはや少ないのだがそこが部分的にであれ伐採されるとなるとそのケモノ達はもはや逃げ場を失う。周辺にはもう森はないのだから人家にでも出くわして最後となる。かろうじてその原生林にのみ残された貴重な植物種もそこで失われればもはや周辺の山々からはとうに失われてしまったものであり、この地域個体群はそこで絶滅してしまう。現在かろうじて残された原生林はほとんどがこのような不十分な大きさしかもたない危機的な存在ばかりである。今やこのわずかばかりの原生林を核としてその周辺にその種子を広げ豊かな自然を取り戻すべき時である。失われた種やその遺伝的な多様性は二度と我々が回復する手段はないのであるから。またこのような研究は今後重要性を増すだろう。

附：ここでの原生林とは自然度の十分に高いものという

* 信州大学教育学部志賀自然教育研究施設